

さらば南紀の海よ

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章 母の死

7

第二章 さっちゃん

38

第三章 過去からの声

67

第四章 母の面影

90

第五章 反応

115

第六章 兄弟

146

第七章 さらに南紀の海よ

178

さらば南紀の海よ

第一章 母の死

1

母が、突然、倒れた。

五月下旬の真夜中のことである。

伊藤雄介は、慌てて救急車を呼んだが、その後、文字通り、悪夢の連続だった。

運ばれた救急病院では、ガンの疑いがあるの
で、自分のところでは、しっかりとした治療が
できない。だから、がんセンターに送るといわ
れた。

がんセンターでは、血液のガンだと、診断さ
れた。

「あなたが、ご家族ですか？」

と、医者が、きいた。

雄介は、

「一人息子です」

と、いった。

「失礼ですが、現在、お仕事は、何をやってい
らっしゃるのですか？」

と、医者が、きく。

顔中無精ぶしょうひげで、生気のない顔をしていた
雄介のことを、医者は、信用できなかったのだ
ろう。たしかに、疑われても、仕方がなかった。
現在、雄介は二十八歳である。しかし、ちゃ
んとした職業には、就ついていない。これまで雄
介は、母・美由紀、五十歳のお荷物のような、

生き方をしてきた。

少しましな方方をすれば、売れない作家だろう。しかし、これといった作品は一つも書いていないから、作家とは、呼べないかもしれない。

「現在、無職です」

と、雄介は、いった。

医者は、無言で、目をしばたいた。

こんな頼りない男に、母の本当の病状を説明しても、分からないとでも、思ったのだろうか？ だから、雄介は、

「本当のことを教えてください」

と、いった。

「今も申し上げたように、お母さんには、血液のガンの疑いがあります。さらに、詳しく調べないと断定はできませんが、一応、覚悟だけは

しておいてください」

と、医者が、いう。

「ガンではない可能性だってあるんでしよう？」

雄介が、きくと、医者は、

「ええ、もちろん、ありますが、あまり、期待はしないでください」

と、表情を変えずに、いった。

「血液のガンだとしたら、どうなるんですか？」

「本来なら、こういうことは、申し上げたくないのですが、あなたが、息子さんで、本当のこととが、知りたいとおっしゃるので、いいましょう。血液のガンという診断が正しければ、現在の医学では、手の施し^{ほどこ}ようが、ありません。長くても一年、短ければあと半年の命と考えてく

ださい」

と、医者^が、いった。

母は、そのまま、入院することになった。

担当の医者も雄介も、ガンだということは、

母には、いわなかった。そのせいか、母は、意外に、元気だった。血色もいいし、熱もない。

そのこともあってか、

「これなら、すぐに退院できるかもしれないわね」

と、母は、雄介に向かって、いった。

「ああ、すぐ退院だよ」

と、雄介も、言葉^を、合わせる。

「その間、店のほうを頼むわ」

と、母^が、いった。

雄介が物心つく頃から、母は三軒茶屋^{さんげんじや}で、自分の名前を付けた「みゆき」という飲み屋をや

つて来た。

「俺にできるかどうか分からないけど、やってみるよ」

と、雄介が、いうと、

「さっちゃんに、電話をして、店を切り盛りしてくれるように、いっておくから、あんたも手伝ってあげてね」

と、母^がいった。

さっちゃんというのは、よく店を手伝ってくれる三十代の女性である。同じ三軒茶屋に住んでいて、昼間は、実家の喫茶店を、手伝っている独身の娘である。

その日は、雄介も、病院に泊まって、次の日、三軒茶屋の家に帰った。

夕方になると、さっちゃんが来てくれて、何とか、「みゆき」は、店を開けることができた。

さっちゃんのおかげで、いつものように、店は、常連客が、やって来て、夜中近くまで賑やかだった。雄介自身は、何をすることもできないので、さっちゃんに、いわれるままに、料理を運んだり、お酒に爛かんをつけたり、洗い物をしたりして手伝った。

母は、現在五十歳である。子供の雄介から見ても、美人で、いわゆる、男好きのする顔というのだろう。

毎日のように顔を出す、なじみの常連客が多くて、店を開けると、常連客たちが、どっと押しかけてきた。母が入院したのを知って、心配して顔を出したのである。

「どうなんだ？」

と、きかれたので、雄介は、

「母は、ちょっと、働きすぎで、疲れたらしい

んですよ。それで、病院に四、五入院して、体をゆっくり休めなさいと、お医者さんに、いわれました。何日か休んでから、また店に出てくると思います。ご心配をかけてすいません」
とだけ、いった。

「ママには、一日も早く、帰ってきてもらわないと困るよ」

という老人の客もいれば、

「美由紀ちゃんがいないと、寂しくてたまらないよ」

という人もいた。

雄介は、今までに、店を手伝ったことがほとんどない。だから、次の日も、さっちゃんの指示に、したがって、カウンターの途中でウロウロしていることしかできなかった。それでも、何とか、看板まで店を開けることができた。

2

翌日、病院に行くと、昨日は、二人部屋だったのに、個室になっている。そのことが、雄介を暗い気分にした。

医者に会々と、案の定、

「細かく調べた結果、残念ながら、やはり、血液のガンでした」

と、いわれた。母にそのことを告げる勇氣はなかった。

「ダメです。僕には、母に、ガンだなんていえません」

と、雄介が、いうと、医者は、

「分かりました。しかし、二日間にわたって、検査をしたので、お母さんは、ご自分が、ガン

であることに、薄々感づいておられるようですよ」

と、いった。

医者のいう通りだろうと、雄介が、思ったのは、母は、いつも元気がよくて、二十八歳にもなって、決まった仕事のない雄介を叱りつけるように、話すのだが、入院してからは、雄介に對して、妙に、優しくなっていたからである。

その後、毎日見舞いに行くうちに、その優しさが、どんどん、強くなる一方で、体は衰弱していった。

雄介が、

「何か欲しいものはない？」

と、きいたのは、入院五日目である。

母は、ベッドに寝たまま、

「旅行がしたい」

と、いった。

「そうだね、病気が治ったら、一緒に旅行に行こう。どこに、行きたい？」

雄介が、きくと、母は、少し考えてから、

「南紀白浜の温泉」

と、いった。

雄介が、エツという顔になったのは、南紀白浜の温泉という言葉を、母の口から、聞いたのが、今回、初めてだったからである。それまで、雄介は、そんな言葉を聞いたことはない。

母は、大阪に生まれている。地元の高校を卒業してから、すぐ東京に出て働き、二十一歳で結婚。翌年、雄介を産んだ後、父と離婚をした。母の過去について知っているのは、それぐらいである。

南紀白浜は、たしかに、大阪に近いが、高校

を卒業してすぐ上京してしまった母が、どうしても、南紀白浜に、旅行したいといい出したのか、雄介には、分からなかったが、それでも、

「南紀白浜か、いいねえ。僕も、温泉が大好きだから、病気が治って、元気になったら、一緒に行こう」

と、いった。

母が、ニツコリする。

「でも、どうして、南紀白浜なの？ 何か、楽しい思い出でもあるの？」

雄介が、きいた。

母は、笑っていたが、答えはなかった。

（たぶん、南紀白浜には、母にとっての楽しい思い出があるのだろう）

雄介は、そう考え、それ以上、深くは聞かなかった。

しかし、聞いておけばよかったと悔やんだのは、それから二日目の、六月五日に、突然、母が、死んでしまったからである。

3

死んでしまったといういい方は、正確ではないかもしれない。六月五日の夜、病院に忍び込んだ人間が、個室に入っていた母を殺したからである。

次の日の六月六日、朝早く、雄介は、病院からの電話で起こされ、
「すぐ来てください」と、いわれた。

(ひよっとして、母の病状が、悪化したのだらうか?)

そう思って、慌てて、病院に駆けつけると、母の病室の前には、医者のほか、何人かの刑事がいた。

もちろん、その瞬間には、刑事と分からなかったが、いかにも屈強そうな男が、二、三人、母が入っている個室の前にいるのは、なぜだろうかと思った。

医者に促うながされて病室に入っていくと、母の顔に、白い布が、かぶせられていた。

「まさか、母は、死んだんじゃないでしょうね？」

と、雄介が、いった。

(危篤きとくかもしれない)

とは、考えたが、死んだとは、全く考えていなかったからである。

医者が、白い布を取ると、そこには、いつも

の母とは、全く違った顔があった。

いつもの母は、美しかった。しかし、そこにあった顔は醜^{みにく}かった。いや、苦痛に満ちた顔のまま、母は、死んでしまったのである。

「申し訳ありません」

と、医者が、いった。

「何があったんですか？」

「まさか、入院患者を殺すなんて、全く考えていなかったのです。病院の責任です」

と、医者が、いう。

最初は、医者 of いることが、理解できなかった。何をいつているのか分からなかったのだ。

「僕には、よく分からないのですが、つまり、何なんですか？」

「何者かが、病院に忍び込んできて、お母さん

の病室に侵入して、首を絞めたんです。お母さんは、殺されたんです。それで、警察も来います」

と、医者が、いった。

さつき、病室の前にいた屈強な男たちが、雄介を、一階の休憩室に、連れていった。四十年配の刑事が、警察手帳を、雄介に見せた。

そこには、警視庁捜査一課、亀井という名前があった。

「こんな時に申し訳ないのですが、あなたのお母さんを殺した犯人を、見つけたい。それで、あなたに、協力していただきたいのですよ」

と、亀井が、丁寧^{ていねい}な口調で、いった。

それでもまだ、雄介には、事態が、よく呑み込めなかった。全てが、現実のものとは、思えないのだ。

今年で、五十歳の母は、たしかに、年齢のわりには若く見える。色気もあるほうだろう。しかし、入院してからは、それまで元気だった母が、別人のように弱っていくのが分かっていた。そんな母を、いったい、誰が、殺したのだろうか？

「僕には、全く分かりません」

と、雄介が、いった。

「何が分からないのですか？」

亀井という刑事が、きく。

「母が殺されたということが、理解できないんですよ」

「しかし、犯人は、わざわざ、病院に侵入して、あの個室に入り、あなたのお母さんの首を絞めて殺したんです。物盗りの犯行でも、偶然の犯行でもありません。犯人は、初めから、あなた

のお母さんが、この病院に入院しているのを知っていて、犯行に及んでいるのです。それで、息子さんのあなたに、お聞きするのですが、心当たりは、全くありませんか？」

「母は、血液のガンで、倒れてしまい、入院していたんです。そんな母を、いったい誰が、殺すんですか？」

「それを、これから調べたいのですが、お母さんの伊藤美由紀さんは、三軒茶屋で『みゆき』という名前の飲み屋を、やっていた。これは、間違いありませんか？」

亀井刑事が、きいた。

しつこい。念を押すような聞き方をする。これが、尋問というものだろうか、と、雄介は、思っている。

「ええ、そうです。もう二十五、六年やってい

ました」

「人気のある店だったそうですね?」

「ええ、常連客がたくさんついていたので、繁盛していました」

「お母さんは、今年で五十歳ですね? お母さん目当てに、店に飲みに来るお客さんも多かったと聞いたのですが、これも、本当ですか?」

「僕は、店の仕事には、タッチしていなかったもので、よく分かりませんが、そういう、ウワサを、聞いたことはあります」

「それでは、お母さんのことで、お客同士でケンカをしたとか、何かトラブルになったというようなことを、聞いたことはありませんか?」

「僕の知っている限りでは、一度も、ありませんよ。たしかに、母は、人気者だったようですが、店に来るお客さんは、皆さんいい人ばかり

で、ケンカとか、騒動なんか起きたことは、一度もないと、聞いています。それにですね」

と、雄介は、怒ったような口調で、いった。

「それに、何ですか?」

「母は、突然、体調を崩して、入院していたんです。店に出ていた時なら、お客さん同士がトラブルになって、ケンカすることもあったかもしれないませんが、倒れて、入院したんですよ。病院からお聞きになったかもしれないませんが、血液のガンです。母は、長くて一年、短ければ半年の命だと、いわれました。入院してから後、母が、急速に、衰弱していくのが分かりました。そんな母を、いつたい、誰が殺すんでしょうか? もうすぐ死んでいく人間を殺したって、意味がないじゃ、ありませんか?」

と、雄介が、いった。

「お母さんのガンのことは、担当の先生に聞きました。長くて一年、短ければ半年ということも、聞きました。たしかに、あなたのいう通り、ガンで入院していたお母さんを、いったい、誰が、何のために殺したのか？ 刑事の私にも、分かりません。不思議で、仕方がありませんが、現実には殺されてしまったのです。しかも、犯人は、夜、わざわざ、この病院に侵入してきて、ベッドに、寝ていたお母さんの首を絞めて、殺しているのです。そこにあるのは、はっきりとした、殺意です。当然、殺さなくてはならない動機が、あるはずです。私たちとしては、その動機を、知りたい。それが分からなければ、捜査が、進みませんからね。失礼ですが、お母さんの、貯金は？」

亀井刑事が、きいた。

「僕は、母が、いくら、貯金していたかは知りません。しかし、賑わっていたといっても、小さい店ですから、そんなに、儲かるはずがないのです。百万あれば、いいほうじゃないでしょうか」

と、雄介が、いった。

「もしそうなら、犯人が、お金目当てで、お母さんを殺したのではないことは、明らかです。ほかに、お母さんは、土地を、持っていますか？」

「土地なんて、持っていないですよ。あの店だつて、借家です」

と、雄介が、いった。

「お母さんは、ご主人、つまり、あなたのお父さんと別れてから、ずっと独身でしたね？ いつ頃、離婚されたんですか？」

もう一人の刑事が、きいた。

こちらは、二十代と思われる若い刑事である。

「僕が生まれてすぐ、離婚したと、聞いています」

「それで、離婚した、あなたのお父さんですが、その人は、今、どこで、何をしているか、ご存じですか？」

「病気で、亡くなったそうです。それ以外は、何も知りません。父の写真も、一度も、見たことがないので」

と、雄介が、いった。

これは、本当だった。

「あなたが生まれてすぐに離婚したとすると、三十年近く、お母さんは、一人だったわけですね？」

「そうですが、それが何か、母が殺された理由

と関係しているんですか？」

「いや、今の段階では、どんな小さなことでも、いろいろなことを、調べたいのですよ。お母さんの関係者全員に、当たってみたいと考えています」

「全員なら、僕も当然、容疑者の中に入るんじゃないかもしれませんか？」

雄介が、きくと、若い刑事は、笑って、

「あなたが殺したんですか？」

と、きく。

「僕は、殺したりなんかしませんよ。二十八歳の今日まで、一人で、僕を育ててくれた母ですからね。殺す理由なんてないでしょう。たしかに、ずっと、親不孝を続けていますが、それでも、母は、僕にとって、世の中でいちばん大事な人なんです」

「念のためにお聞きするのですが、昨日の夜、あなたは、どこにいたのか、教えてもらえませんか？」

「僕のアリバイですか？」

と、雄介は、苦笑してから、

「店の近くのアパートに、母と一緒に住んでいるんですが、そこで、夜中近くまで、テレビを見てました。その後、眠りました。そうしたら、朝早く、病院からの電話で、叩き起こされたんです」

「お母さんは、たしか、大阪の、生まれでしたね？」

「そうですが、母の両親は、すでに亡くなっていますから、母が、大阪のことを話したこともないし、大阪に、帰ったこともありませんよ」

雄介は、いった。

「お母さんから見ると、大阪の両親の家は、実家に、当たるわけですが、亡くなっているとすると、今、向こうの親戚などとは、ほとんど、つき合いがないわけですね？」

「ほとんどというより、全く、ありません。向こうの親戚を、母が、僕に紹介したことは一度も、ありませんから」

と、雄介が、いった。

4

刑事たちは、雄介が、母や、別れた父について、何も知らないことに、呆れたような顔をして、帰っていった。

たしかに、雄介は、自分が生まれてすぐ、母と離婚した父のことを、何も、知らなかったが、

それは、母が、父のことを、何もしゃべらなかつたからである。

殺人事件なので、母の遺体は、すぐに、司法解剖に回された。当然、葬式は、その後になつてしまふ。

母の遺体が、司法解剖から戻ってくると、三軒茶屋の商店街が、葬儀をやってくれることになつた。雄介は、できれば、自分の手で、ひっそりと、やりたかつたのだが、店に来ていた常連客たちが、自分たちがやるといって、聞かなかつたのである。

おかげで、かなり盛大な、葬儀になつた。

母は、銀行には、百二十万円ほどの預金しか、持っていなかつた。それでも、立派な葬式が出せたのは、常連客たちのお陰だと、いつてもよかった。

葬式には、病院で会つた刑事たちも参列した。そして、密かに、写真を撮りまくっていたのを、雄介は、見ていた。

母を殺した犯人が、弔問客に紛れて、姿を現すかもしれないと、警察は、思ったのだらう。

葬儀のあとで、さっちゃんが、できれば、自分の手で、今まで通りに、店を続けたいというので、それは、さっちゃんに、任せることにした。

5

世田谷警察署に、捜査本部が置かれた。捜査に当たるのは、警視庁捜査一課の、十津川班である。

司法解剖の結果、死亡推定時刻は、六月五日

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。